

大毛池田遺跡・門間沼遺跡に見られる近世のハザ遺構

西原正佳

I. 近世ピット列の検出

当センターによる、一宮市・葉栗郡木曾川町にまたがる大毛池田遺跡・門間沼遺跡の発掘調査は、平成8年3月をもって、ほぼ、終了する。

その大毛池田遺跡95A区で、現代の耕作土を除去した直下から、近世の、両脇に側溝を伴う「道」とともに、規則的に並んだピット列が検出された(第1図)。周辺に当時の生活域の広がり確認されず、生産域に伴う遺構であろう。また、門間沼遺跡の95D区でも、同様の状況下でピット列の存在が確認された(第2図)。同遺跡95A区では、道こそ検出されていないが、やはり近世の水田遺構とともに、同様のピット列が検出されている(第3図)。

ピットの規模は、直径80cm～2m、深さ20cm～40cmと、個体差がある。平面形態は、円または角丸方形。断面形態はU字状である。斑状の埋土が充填されており、一部に重複が認められた。ピット同志の間隔は、大毛池田遺跡A区で2.5m程度。門間沼遺跡D区が2m程、A区が1.6m程度である。調査区ごとでピット間の距離が違ってはいるものの、ほぼ等間隔で、東西方向に、ピットが並んでいることがわかる。

大毛池田遺跡A区と門間沼遺跡D区で検出された「道」については、明治17年発行の『地籍図』と、昭和36年発行の『木曾川町土地入図台帳』とを参照し、その有無を確かめた。その結果、門間沼遺跡A区を含む3地点で検出されたピット列は、少なくとも近世には存在していたであろう、東西方向の道に沿って位置していることがわかった。

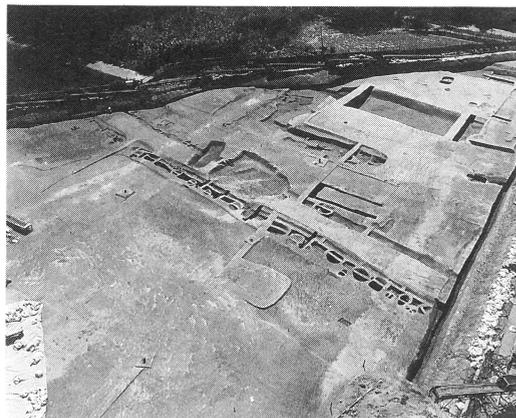
以上のような検出状況と地図とを元に、ここま

で述べてきた「ピット列」とは「柱穴列」と呼ぶべきであり、即ち、近世の「ハザ」遺構であろうと推測される。「ハザ」とは、稲を干す用具のことで、「稲架」「稲木」「稲機」「稲掛け」「いなはた」「はぜ」「はざ」「はさ」等、地方によって名称・形態とも様々である[柳田 1932: 253-275]。ここでは、この地方の一般的な呼称である「ハザ」を用いることとする。

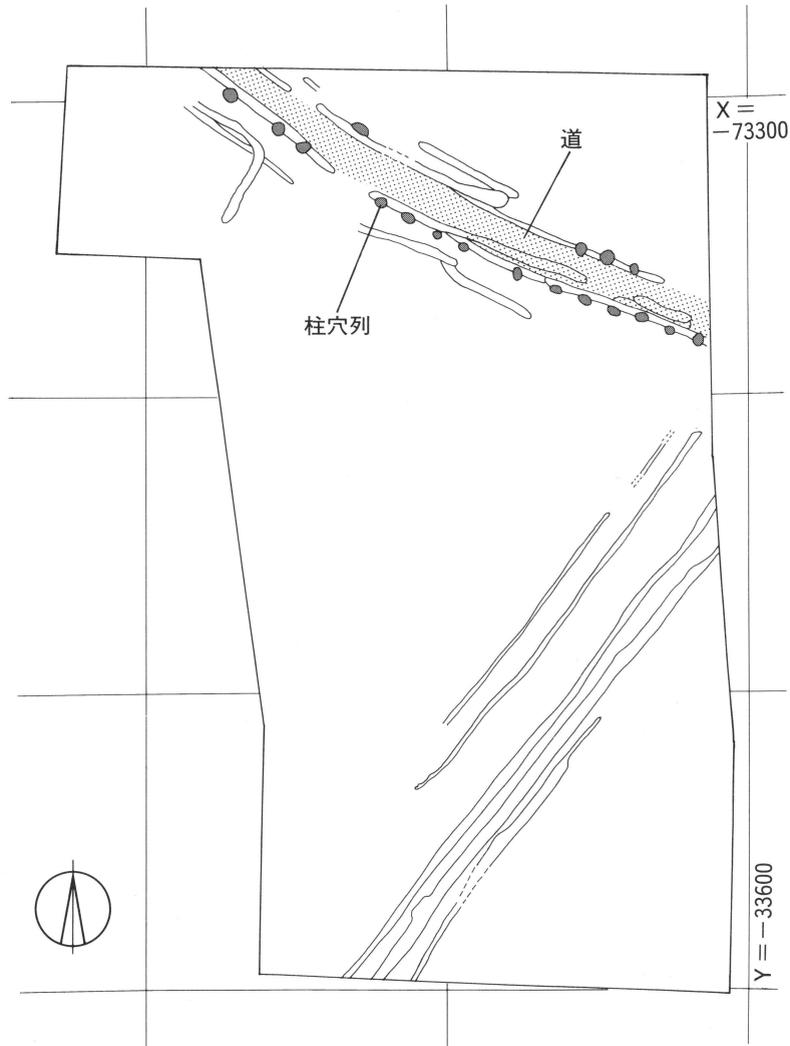
なお、以下に続くIIとIIIに関しては、当センター発掘作業員、前田利昇氏の談に依るところが大である。記して謝意を表する。



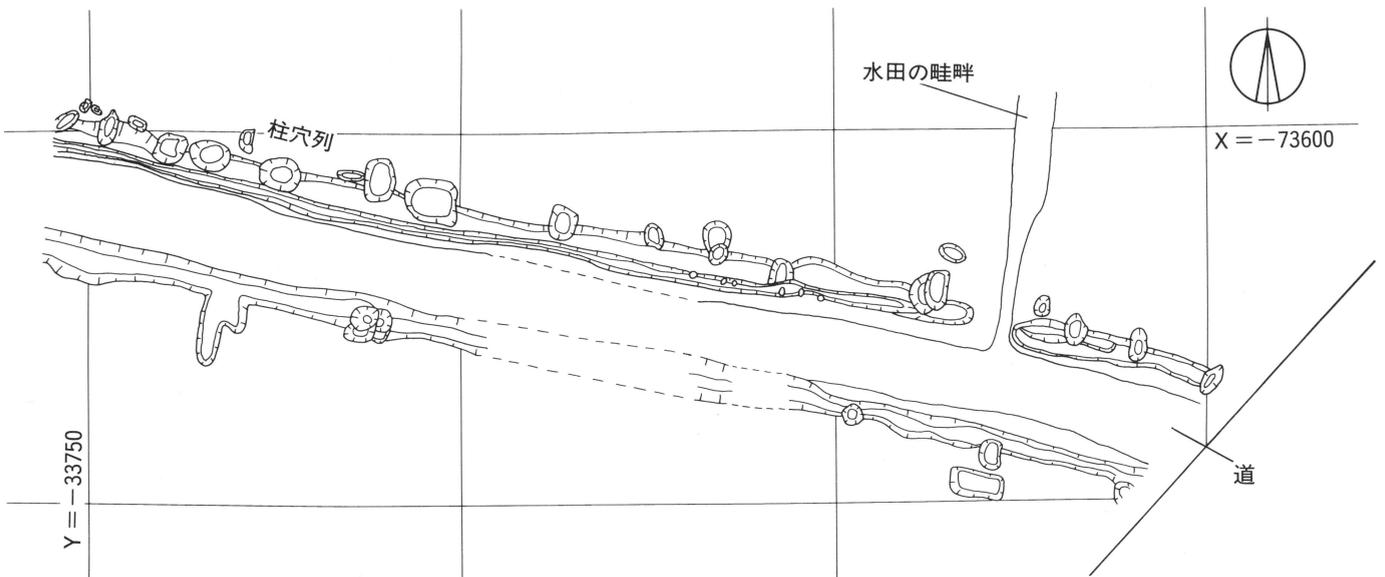
大毛池田遺跡95A区 柱穴列と道



門間沼遺跡95D区 柱穴列と道



第1図 大毛池田遺跡95A区中・近世遺構図 (1 : 500)



第2図 門間沼遺跡95D区近世遺構図 (1 : 250)

II. 尾張北部における伝統的なハザの立て方

愛知県では、昭和35年頃から、伊勢湾台風を契機として、粃の乾燥にライスセンターと呼ばれる大規模な乾燥施設が導入されるようになる [矢島 1991 : 353]。ハザによって、粃だけでなく刈り取った稲そのものを乾燥させるには、資材が必要であり、非常に労力を要するので、今日では敬遠する農家が多い。が、近年、天日干しの米の方が品質が良いということで、ハザが復活しつつあるという。余談ではあるが、筆者は最近、滋賀県湖北産のハザ干し米を食する機会を得た。その結果、日頃常食しているライスセンター乾燥の米に比べ、艶・粘り・香り等において、格段に優れている事を確認した。

では、尾張北部で現在も行われている、伝統的なハザの立て方を紹介する。「3本陣立て」と呼ばれるハサの立て方も一般的なのだが、ここでは本稿に最も関連の深い、「2(3または5)階バサ」についてのみ触れる。以下、右頁の写真を参照されたい。

「主柱^{おもぼしら}」は、桧の丸太材の先端部分を購入して用いる。桧は建築用材にも用い、耐久性に優れている。直径は10~15cm。長さは2階バサ、3階バサ、5階バサのどれを立てるかによって変わる。これを地面に直接立てるのだが、木には「ウラ(先端に近い方)」と「根元」とがあり、必ず根元を下にする。規模の小さいハザは、柱で地面を突いて

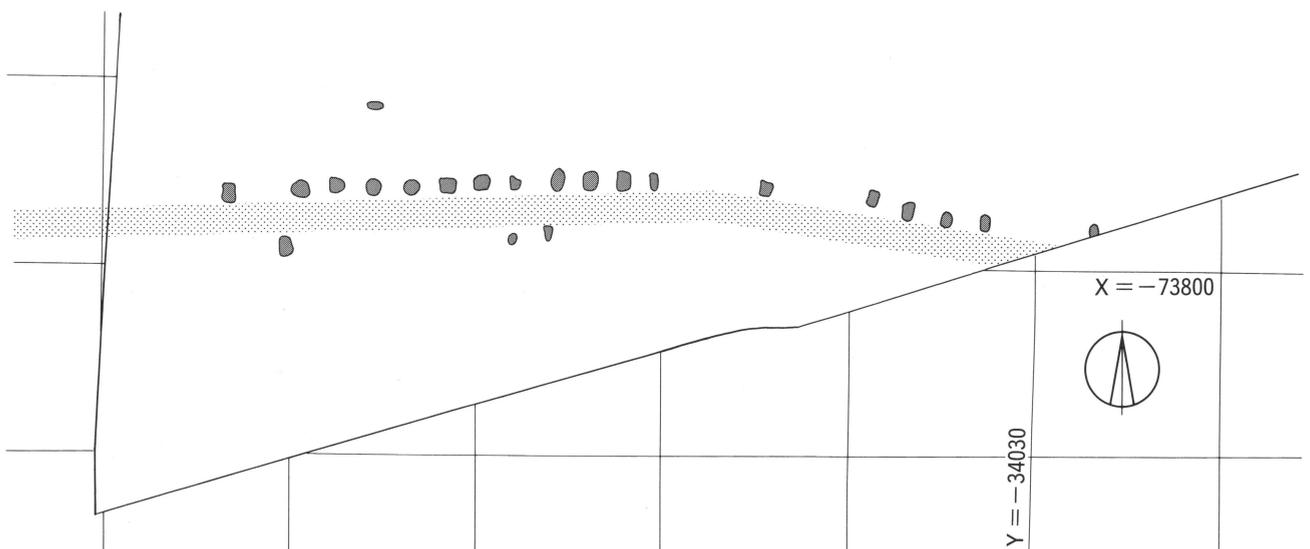
穴をあける。規模の大きいハザは、穴を掘り、主柱を埋める。柱間の間隔は、約1間である。主柱の本数は、規模に応じて変わる。

次に「横木」をかける。直径は10cm程度で、桧なら3間、竹なら5間程度の長さのものを用いる。竹は屋敷にあるものを、寒中に切る。これを「寒竹」と言い、虫が入りにくく、50年はもつ。この横木を主柱に取り付ける。その際、荷重で横木が下がらないよう、特殊な結索方法があるが、ここでは詳述しない(写真参照)。横木の本数は、5階バサなら5本、3階バサなら3本である。連結する場合は、必ず「ウラ」と「根元」を重ねるようにする。

最後に約20°の角度で筋交を入れ、主柱を支える。刈り取った稲を干すのは、2週間から20日程度である。

III. ハザの方向性・位置から

この地方では、ハザは東西方向、または南東・北西方向に立てる。これは、地形上からくる気象的特徴として、愛知県から若狭湾を結ぶ線は、本州の中でも最短距離で日本海側に通じており、冬季の季節風が殊のほか強い [井上 1991 : 566] 事に起因する。ハザがまともに西または北西の季節風を受け、倒壊するのを防ぐため、この方向性をもって立てられる。いわゆる「伊吹^{おろし}嵐」対策であ



第3図 門間沼遺跡95 A区近世遺構図(1:500)

る。かつて尾張北部では、稲刈りの最盛期が12月はじめと遅く、脱穀も年末に始め、年始に終わるのが一般的であった。実った稲を長期間放置しておく、「胴張りがよくなる」と考えられていたからである。新米は小正月（1月15日）に間に合えばよいという感覚であったという。従って、冬の季節風からハザを守るための「方向性」が、強く意識されていたのであろう。

次に、ハザの立つ位置である。田の中程に立てることにも、盗難防止という意味がある。しかし、麦・菜種などを栽培する、二毛作に備えて「畦」つまりあぜ、田の境に立てるのが、かつては原則であったという。さらには、ハザ資材や稲の搬入・搬出に都合の良い、道沿いが最も適地となる。

以上のことから、大毛池田遺跡・門間沼遺跡で検出された近世の柱穴列は、ハザの主柱を立てるために掘られたものであり、柱穴の規模からすると、5階ハサ程度のものであったであろうと推測される。

IV. 近世の農書に見られるハザ

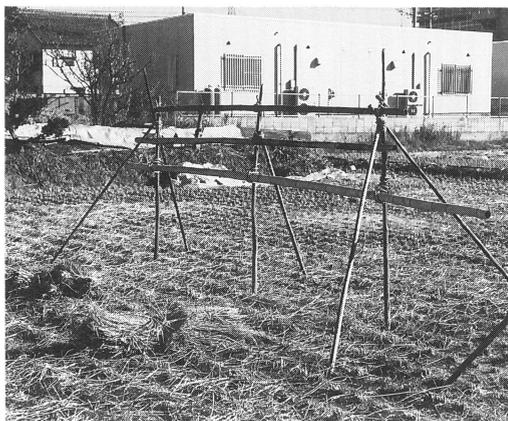
ハザについて、承和8（841）年、太政官符をもってこれを奨励している。大和国宇陀郡の人が田中に木を構えて、刈稲をこれに掛けて乾しているが、これはよいから全国に奨励するようにと令し

ているのである〔古島 1975：167〕。しかし、平安前期、既に推奨されていたハザ掛けによる稲の乾燥が、直ちに普及したわけではない。ここで、本稿の目的である近世のハザに関する記述を、代表的な農書の中に、年代順に追ってみたい。

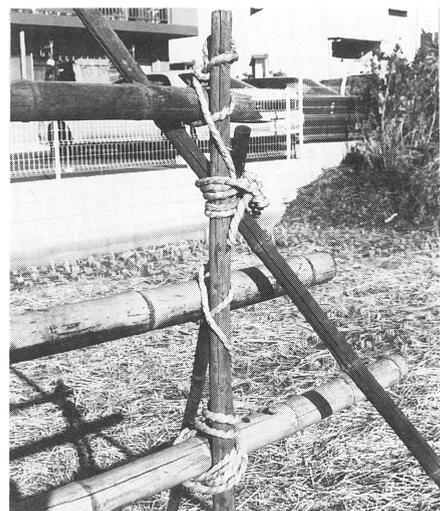
元禄10（1697）年に上梓され、後の農政や農学に多大な影響のあった宮崎安貞の『農業全書』では、次のように説いている。「刈干事ハ、高田ハ其ま、其田に拵げほすべし。深田の干べき地なき所ならば、溝の土手に木をうへをき、其枝またにかけてほし、又ハ竹を三本結合わせ泥中にしかとさし立、其さき二方に稲一把づゝさして干事、水所にて、専是を用ゆへし〔島野 1978：138〕」。湿田では、畦畔に木を植え（これはハザの主柱に相当する。現在でも新潟県・滋賀県北部などに見られる。）、あるいはハザを立てて稲を乾燥させるよう説いているが、乾田では、地干しでよいとしている。

貞享元（1684）年刊の、佐瀬末盛による『会津農書』には、「稲干様は、立稲にて久敷置、柄しなへの能仕たる時にほせば、大方一日ほして上る〔古島 1975：413〕。」とあり、乾燥させる時間が短い上に、ハザに関する記述はない。

次に、宝永4（1707）年上梓、土屋又三郎の著になる『耕稼春秋』では、稲の乾燥法について、



三階バサの一例（一宮市馬見塚）



主柱と横木の結索方法

次のように述べている。「稲干くほすとハ、稲一把宛四方へ株を上にしてひろけて、堅田ハ其田に干、野川原これ有る所ハ田より持出て干なり」[堀尾 1980 : 28-29]。」「刈て干事ハ堅田ハ其儘田に掛け干すへし。深田の干すへき地なき所ならハ、はさに懸て七日程干て稲入る」[堀尾 1980 : 220]。『農業全書』同様、乾田では、地干しを基本として考えており、湿田でのハザ掛けだけを勧めている。

以上のように、江戸時代前期の農書は、湿田ではハザが有効であると説いてはいるものの、さほど積極的にハザを推奨してはいないようである。あるいは、乾燥そのものに対する意識が乏しいとも言えよう。

これが江戸時代も後期になると、ハザ干しについての認識が随分と変化してくる。安政6(1859)年刊の山崎久作『農暇必読』には次のようにある。「稲は刈て掛干しにすれば、第一収米多く、米の性よくつきて減りすくなし。虫付くことも薄くその外莫大の得分多し…」[山崎 1859 : 22-23]というように、収穫量が増え、品質が向上し、虫も付きにくいなどと、ハザの効用を説いている。次いで、ハザで乾燥させた米について、「そのところの米に限り、近村よりは殊に米に艶ありて売値段もよかりしは、いかなることならんと問ひ来人毎に、…中略…。いつも同値に売し近村よりは、一石にて銀三匁ばかりは値あげして、仲買の者競ひて買やうになりたい。」と続け、ハザ干しの米は高品質で、商品価値も高いと述べている。さらには、「藁もむせることなかれば、力つよく艶あり。売値段もよろし。」と、米の副産物である藁にも、ハザ干しは有効であると言及している。

やはり安政6(1859)年に上梓された、尾張国海西郡大宝新田在住、長尾重喬の『農稼録』には、「惣じて掛干にすれば、藁の根元より次第に枯て其藁茎の精気皆穂先に止り、科刈切て後も猶よく実入る物なれば、掛干を第一とするなり。皆はさに掛れば最上なれども諸色も多く持ねバ不可、又

手間も多く入べき事なれば、悉ハサにせずとも、深田の稲はハサに掛、高き田の稲ハ刈て其田に建干とて、穂を下にし藁束を上にして藁の根を枯すべし。是もハサの次に実入もよし、藁も乾きてよし」[岡 1981 : 81]。』と、ハザ干しが第一であると説いている。

幕末、ハザ干しの普及に努めた農学者に大蔵永常がいる。文化元(1804)年の『老農茶話』・文政7(1824)年の『豊稼録』および、永常の著述とも言われる文政元(1818)年刊、兎島如水・兎島徳重の『農稼業事』でも様々にその利を説いている。ここでは品質の向上というハザ干し本来の目的をさらに一歩押し進めて、販売価格が有利になる・酒米にも良い・藁加工品も優れるなど[中田 1979 : 169-171]といった、加工品を含めた商品価値の向上という新しい観点が見られることに注目したい。永常は、従来の米穀本位の自給自足経営のかわりに、副業的原料徳用作物の栽培と製造加工の技術を興し、農業経営を商品・貨幣経済機構に順応せしめようとした[土屋 1946 : 19]人物で、安政6(1859)年の『広益国産考』をはじめとする多くの啓蒙書を執筆する中で、商品作物の普及に努めている。ハザ干しを強く推奨する背後にも、市場での競争力のある米とその副産物の作り方を普及する意図があった。

V. 結語—近世ハザ遺構の背後にあるもの

さて、農書の記述を追うことから、ハザによる稲の乾燥方法は、平安前期から奨励されつつも、なかなか農作業の常識とはならなかった事が理解された。がここで、江戸後期の農書に、それまでの論調とは異なり、より強く、ハザによる稲の乾燥が説かれていることに注目せねばならない。米およびその副産物に、市場での競争力をつけるための営為がハザ干しであることが知られるのだが、ここで大毛池田遺跡・門間沼遺跡の位置する葉栗

郡の地域的事情にも着目してみたい。

当地方は、名古屋という城下町をひかえている。江戸時代の名古屋では、領主層の城下町への集住にともなう、商業的都市人口の集中が見られ、これらの都市人口の要求から、都市近郊に、売するための農産物生産が現れる要素が生まれた。徴収した年貢米をのみ持つ武士層は、当然その他の生活必需品に対する買い手として市場に現れることになる。都市の周辺には各種の農産物の名産地が成立し、新しい技術も生まれてくる〔古島 1975：356〕。また当地では中世以来の伝統を持つ黒田の市が、貞享5（1688）年に復活し、一宮村の三八市が享保12（1727）年に開設されるなど、尾張藩有数の市場をひかえていた。天保13（1842）年の「一宮六斎市商人書上下帳」は、三八市の構成および商人名、その出身地などを詳細に記録している。その中から、本稿に関係する特徴を拾うと、①綿業関係商人が多い②肥料商人の存在③米雑穀青物を商う商人が多い④草履わらじなどの藁製品を商う商人の存在等があげられる〔塚本 1977：923-929〕。①については、江戸時代、中島郡・葉栗郡・丹羽郡にかけて、綿の一大産地であったことはつとに名高い。文久2（1862）年の調べでは大毛村にも2人の木綿小買商人がいた〔塚本 1977：931〕。門間村に近接する葉栗郡里小牧村では、寛延3（1750）年～嘉永3（1850）年にかけての畑面積中30～36%が綿で、首位を占める〔杉本 1981：501〕。綿は砂地を好み、不足する養分を補うため、従来の刈敷・厩肥・人糞尿等の自給肥料では追いつかず、干鰯を中心とした金肥を多く必要とした〔岡 1979：228〕。このことは②にも関連する。18世紀中頃から干鰯が高騰しはじめ〔岡 1988：167〕、葉栗郡玉ノ井村・里小牧村では、天保年間に干鰯の代金滞納に関わる訴訟もおこっている〔杉本 1981：503〕。貨幣経済が農村に浸透し、商業的農業の発達を促していることの証左となろう。

③については、綿作をはじめとする商品作物の栽培・加工が専門化し、そのため自給自足体制が崩れつつあったことを窺わせる。④については詳細に述べる余裕を持たないが、これもやはり自給自足体制の崩壊の一現象ととらえられよう。ちなみに一宮周辺の近世以来の農家は、ツシと呼ばれる屋根裏部屋を持つのが一般的であった〔伊藤 1975：26〕。ツシとは農閑期の生活用具の製作・燃料・草屋根葺きの材料などのための藁を貯蔵する空間である〔宮崎 1985：275〕。藁は肥料としての価値も高く、手間暇かけてハザで乾燥させるだけの必要性が十分にあったと思われる。

江戸時代後期にいたって、貨幣経済の農村への浸透によって、市場での競争力のある米や藁を生産すべく、ハザ掛けの必要性が高まったことについて述べた。大毛池田遺跡・門間沼遺跡の発掘調査はほぼ終了したが、近世農民の生きるための営為は、未永く記録されるべきであろう。

引用文献

- | | | |
|-----------|------|----------------------------------|
| 柳田国男 | 1932 | 『分類農村語彙』上巻 東洋堂 |
| 矢島喜久治 | 1991 | 「乾燥調製施設の移り変わり」『愛知の稲』 愛知の稲編さん会 |
| 井上隆雄 | 1991 | 「愛知の稲作の特徴」『愛知の稲』 愛知の稲編さん会 |
| 古島敏雄 | 1975 | 「日本農業技術史」『古島敏雄著作集』第6巻 東京大学出版会 |
| 島野至他 | 1978 | 「農業全書」『日本農書全集』第12巻 農山漁村文化協会 |
| 堀尾尚志・岡 光夫 | 1980 | 「耕稼春秋」『日本農書全集』第4巻 農山漁村文化協会 |
| 山崎久作 | 1859 | 『農暇必読』初編中巻 青雲堂 |
| 岡 光夫 | 1981 | 「農稼録」『日本農書全集』第23巻 農山漁村文化協会 |
| 田中耕司 | 1979 | 「農稼業事」『日本農書全集』第7巻 農山漁村文化協会 |
| 中田謹介 | 1979 | 「農稼業事」・解題（2）『日本農書全集』第7巻 農山漁村文化協会 |
| 土屋喬雄 | 1946 | 『広益国産考』 岩波文庫 |
| 塚本学他 | 1977 | 『一宮市史』本文編上 一宮市 |
| 杉本精宏他 | 1981 | 『木曾川町史』 木曾川町 |
| 岡 光夫 | 1978 | 「百姓伝記」『日本農書全集』第17巻 農山漁村文化協会 |
| 岡 光夫 | 1988 | 『日本農業技術史』 ミネルヴァ書房 |
| 伊藤喜春他 | 1975 | 『一宮の民俗』 一宮市教育委員会 |
| 宮崎 清 | 1985 | 『藁 II』 法政大学出版局 |